

# 走る

有森信二

鯉の泳ぎを眺めながら  
川の流れに沿い  
余裕のままに微笑み

走っていました

空に向かって走っていました

地面に寝転んだ恰好から

そのまま走り出たのです

真っ直ぐに空に向かい

平坦な道を

胸を張って進み

走っていました

空気が薄くなり

山を越え

だんだんと太陽が間近に

なることなど

何の頓着もなく

薄野を駆け

食用蛙の声を聞き

バンアレン帯を突き抜け  
金星の軌道をくぐり

いくつかの小惑星を

蹴鞠よろしく蹴り

磁気嵐を軽々と抜け

大フレアの炎を潜り

黒点の渦を何なく抜け

平坦な道を

胸張って進み

空に向かって

走っていました

オリオンのリゲルを

横に見て

ペテルギウスを足先で

蹴り

息を乱すことなく

ときどきは

両手を代わる代わるに

振ったり

回したりしながら

走っていました

呼吸など楽で

距離といっても

ほんの束の間の程で

シリウスを折り返し

元の路を辿るなど

造作もないことです

深呼吸一つすると

赫色の確信をしっかりと抱いて

また

すたすた

走り始めました

## 死の故郷

ワニになったり  
釣り天井になったり  
するのです

死が空中に落ちていました  
もともと死の故郷は  
空中にあるのです  
死と言うより  
生の卵だとも言いますが

生の卵は  
どこの誰がいつ生み付けた  
ものか  
空中の至るところに  
ポーン弾んでいます  
いつでも  
どの方向にでも  
卵は瞬時に移動し  
ニンゲンになったり

二億年前の空間に呼ばれて  
行く卵もあれば  
三千年後の山脈になる  
卵もあります

卵の一つ一つは  
とてもプライドが高く  
己の役割をよくよく  
心得ているのです  
使命とか言う  
しかつめらしい言い方を  
する場合もあります  
彼らの内には遺伝子だの  
運命だのという素因子の  
使命が  
十文字に組み込まれていて

忠実に役目を果たすことが  
大義なのだと言います  
落ちて浮かんでる死  
いや生の卵たちは  
それはもう頑固で  
金槌を振り下ろしたり  
鉄砲玉をぶっ放したぐらいでは  
びくともしません  
なにしろ  
死 いや  
死の故郷ですから  
それはもう

## 禁断の実

禁断の木の実を食べました

どれほど美味だったのかという

空気を吸い

水を飲み干す具合に

酩酊感もなく

高揚感ありません

岡の頂上まで

歩いて上っても一時間とかからず

路を違えることもなく

朱色の禁断の実

実は瑠璃色に発光して撓み

ふさふさ実を繁らせ

三歳の子供でも一人で容易く

千切ることができます

禁断の木の実を食べたもので

戻って来たものはない

と言われますが

禁断の木の実を一口食べると

足先が消えます

二口食べると

膝から下が消えてしまいます

一度食べ出すと

途中で止めることは恐らく

出来ないでしょうから

腰が消え

腹が消え

順番に消えていき

すっかり消えてしまうと

禁断の木の実を食べたものたちの

蒼穹の入口が

ぼっかりと大きく開き

なんのことなく

滑り込むこととなります

小鳥たちも競って食べ

嚙猛な恐竜たちは

枝ごと引き千切って食べ

熟して落ちた実を

地面も食べてしまいますし

幹や枝だってエキスを

吸い込んでしまいますから

いま岡の上で見ることが

出来るのは

もちろん消えてしまった

小鳥の

嚙り残した実が八個と

五本の枝が宙に浮かんでいて

浸食された入江のかたちに

切り立った岸の上に

ほろほろほると

風に吹かれている姿です

## 叢

叢には風が淀んでいる  
分け入ってみると

とてつもない古い風が屈み込んで  
いつのものとも知れない  
歌を歌っている

幾つも花が咲いて  
幾つも戦があつて  
幾つも蛇が生まれて  
幾つも吊いがあつて  
幾つも鐘が鳴つて  
幾つも虫が鳴いて

鋭い鎌の刃を当て  
叢に挑もうとする  
鳥や風が運んできた種が

無粋な雑木を繁らせ  
奔放に伸び出した

薄が鋭い葉を尖らせ

背高泡立草が背を越す勢いで

蔓がそれらに絡まり

石が向こう臍を蹴上げ

蛇がゆつたり枝を下り

蜂がいきなり舞い上がる

幾つも土砂が流れ来て  
幾つも火が放たれ  
幾つも土が盛り上がり  
幾つも岸が削られ  
幾つもの朝が来て  
幾つもの月が出て

鎌を腰の紐にはさみ  
一歩を進む  
手には軍手  
頭にヘルメット

石にしたたか躓き

蔓に足首を引かれ

長袖の分厚い作業着の下では

どろどろの汗が煮え滾り

流れて

饅えて

早や発酵をはじめ



# 虚

からっぽ  
なにもない

実は有り余るものがある  
抱えきれないほどの  
ものがある

見えない  
触れどもなにもない  
突き抜けてしまう

実に有り余るものがある  
実に抱えきれないほどの  
ものがある

それが虚